

<b>Title</b>	地理学についての一試論
<b>Author(s)</b>	飯島, 康夫
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.3, 2015.3 :7-11
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5287">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5287</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# 地理学についての一試論

飯島 康夫

## はじめに

ここでは、地理学とはどんなものであるかを簡潔にするすことができればと思う。構成は、つぎのとおりである。まずは地理学の定義、次に身体性、家と親密なやすらぎの場、第三に共同の空間とふるさとの創出、第四に様々な倒錯の危険性、最後にむすびにかえて若干のことばを記したい。

## 1. 地理学の定義

地理学とはどんな領域であるか。これについては、様々な定義があるものとみられる。場所と人間との関係について、いろいろといわれているが、ここでは、一切の煩雑な物言いを避けて、私見としてどのように捉えるかを端的に述べたいと思う。

人は直立の姿勢で地に足をつけて考える。ここで考えるというのは、想像、記憶、そして五感で体感するといった方がより適切かもしれない。地理学とは、そのような状態のことを指している。コペルニクスが現れてから、残念ながら科学的なものの考え方は、地球中心ではなく、果てしない無限の宇宙という深い謎の世界に人を不安に陥れてしまう危険におとし入れてしまった。また、分子生物学に象徴されるような微視の世界に対しても人間は、何も極めることはできない。現在、わたしたちをとりまくものは、決して見極めることができない沈黙である。答えのない沈黙に対して、問い続けるとき、不安にかりたてられるのは、とりわけ自分を囲む中心なき世界の驚愕である。これらの不安に対して、わけのわからない極大と極小の罫にはまることなく、両極端を避けて中間的な立ち位置を肢体で確かめて、足で考え、体感することが地理学の基本ではないかと思われるのである。この意味で「肢体。ここから始める。」「考える肢体に満ちた一つの身体を想像せよ。」といったパスカルの言葉は、そのまま地理学の基本的な

姿勢を言い当てているように思われてならない<sup>1)</sup>。

よく「地に足をつけて考える」といわれる。地理学は自分の足で立ち位置を確かめ、前後、左右、上下を感じ取り安心を取り戻すのである。その意味でこの肢体の一部を一定の地につけて、感じ取り、考えるのは至極、尤もなことであるようにみられる。現に、人は、母胎から出た瞬間から、自らのからだで皮膚感覚を養い、母乳のあたたかさを、はいはいし地面の感覚を、やがて、よちよち歩きを学び、成長段階の最後で直立歩行ができるようになる。これらの感覚を覚えるようになって、はじめて直立姿勢をとることができるようになる。本来の地理学は、ネットのつながりやGPS、そして、一見深遠そうに見える哲学的な抽象思考からとは疎遠なもののようにみえる。それは、抽象的な概念ではなく、直接生きられるのであり、「部屋の一部から大陸全体までのスケール」を持つ全体的ななにかを感じとる営みといえよう<sup>2)</sup>。

## 2. 身体性、家と親密なやすらぎの場

足で立ち位置を確かめることから地理学がはじまるという私見を述べた。そこで次に、この肢体で生きられる場、特に居ごごちのよい、非常にリラックスさせられるところはどこであろうかということに話をうつしていきたい。それは、もちろんそれぞれ人によって異なるかもしれない。一言でいえば、憩いや気さくで気取らず心に潤いを与えてくれるようなところのことである。私は、ボルノウに同意するのであるが、外部からの脅威から庇護しやさしく包み込むような暖かさに満ちた家ではないかと思うのである。現代の日本の田舎にももう残っていないような囲炉裏などがイメージさせられる。異質な世界、未知の世界から庇護してくれる壁で区切られて、心身ともにほっとするような場所のことである。ボルノウによれば、ゲルマン民族にとって古くは家の中のかまどが家

屋の中心であり、親密で聖なる意義をもっており、「祭壇としてのかまど」と表現している。かまどの火は絶やされることなく燃え、煙はそのかまどの上を通過して家の外に出ていくというものである<sup>3)</sup>。また、東スラブ民族にとっても、パンが焼かれお粥が炊かれ暖をとるかまどの火は家の中心とされてきた<sup>4)</sup>。このような囲炉裏やかまどの火に象徴される家の中の場所は、仰々しくかしまる必要のない、心暖められやすらぐことのできるようなところではないかと思われる。

このような場所は、人がわが家としてくつろぎ、くりかえして生活の中心、または、一種の懐かしいふるさとへの憧憬として童心にかえて帰郷するようなどころである。ここは、脅迫や恐怖から解放されて安息と平安な気持ちにさせられるようなどころである。ここは、喧噪からはなれて、断片化し形骸化した生活に一致をもたらす。帰郷の安堵感と懐かしい家の思い出、とりわけ両親の家での住まうことの幼少期の経験が人間本来の母性なるものを帯びた家の形であり、ほっとした温もりを与えてくれるのではなからうか。日本人にとっての囲炉裏の火、ゲルマンや東スラブのかまどの火に象徴されるような心温まる暖は、人間本来が安心して帰ってくるができるようなどころである。このようなやすらぎの場は、外界で課題を果たすために立ち向かう内面的な統一と勇気をあたえると同時に、生活のあらゆる形式化、儀礼、形骸化、分断化、均一化、機械的な行動を一切排除して瞬間ごとの選択と自由、安息をもたらす。バシュラールも同じようなことを表現の違いはあれ、次のように描いている。つまり、家に住まうことの意味とは、「家の母性」、獣のような猛威や「嵐」にたちむかうとき、家の庇護が明らかになり、体験されるということである。外部世界に対する「抵抗の価値」が「人間的価値に転換される」と彼がいったのは、そのような意味である。それは、「つねに一時の屈服を否定し、時がくればふたたび身をおこしてたちなおる」からである。「こうした家

は人間に宇宙の英雄的精神を約束」する。家はわけのわからない「宇宙に対抗する道具」である。家のやすらぎの中心は「宇宙との動的な対抗関係」にあると<sup>5)</sup>。

さらにいえば、家屋の灯火は全世界の似姿であり、注意深く保護されたこの場は幼児にとって最初に根をおろすところ、揺籃である。ここでは、すでにのべたように童心の原初的なふるさとへの憧憬が前提とされている。一組の男女が幼児を庇護する親としておたがい認めあい仲睦まじく暮らしていく家族の姿がイメージされる。安心しきって眠る幼児のそばにはこの傷つきやすいものへの畏敬の念をいだく両親がいる。庇護的であたたかみのある家は同時にほかのひとを惹き付け、他人に対してもやすらぎをあたえてくれる。この家は心のかよいあつた友だちや親しい人たちのささやかな集いの中心にもなる。この家はいつも戸口が開いており、人のこころをほっとさせるのである。家の灯火は神殿の象徴にもなる。語源的に囲いがめぐらされ庇護されているというラテン語の *templum* と神殿をあらわす *temple* がおたがいに対応していることがわかる<sup>6)</sup>。

### 3. 共同の空間とふるさとの創出

ここでは、テーマに入る前に、エンデの「モモ」で物語るものをもとに味わうことができればと願う。登場人物のモモは清潔と身だしなみを重んずる人ならまゆをひそめかねないような異様な風采の小さな女の子である。この子が忘れ去られた小さな円形劇場の廃墟のかたすみに住み込んだ。彼女は、ひたすら不安にかられる人たちの心の叫びに耳を澄ますことができるという素晴らしい才能をもっていた。単純にあいての話を聴くことであった。エンデは、つぎのように言っている。モモに話を聴いてもらっていると、思いまよっていた人が急に自分の意志がはっきりしてくると。また、にらみあっているふたりのひとがいると、彼女はどちらにも失礼にならないよう同じ距離をたもつ

た。沈黙を守ったまま聴き入り、対立した二人は口論の末、互いに抱きついて背中をたたきあった。そして、そのふたりは、モモのところにきてうでをまわし「ありがとう！」といった。友だちがかえると、モモは独りで長いあいだ例の廃墟のかたすみで頭上の満天の星空の荘厳な静けさにひたすら聴き入ったと。エンデは、こう問いかける。「さあ、人に耳をかたむけるなんてたいしたことではないと思う人」がいるかと。「そういう人は、モモのようにできるかどうか、いちどためしてみることに」と7)。

さて、共同の空間とは住み心地のよい家族の共同の住まう場である。人は原則として自分自身をも、また、ある意味で感傷に陥ることなく他者としての配偶者をも、知りつくすことはできない。この意味では、人はひとりであること、つまり、孤独を知る。しかし、それでも、自己を超越したものからみた存在からみておたがいに愛されているものとして、未熟な自他を積極的に受け入れ、理性的に抑制することによっておもんばかり愛のある居場所(暖かみのある家庭)を形づくっていく営みがたえず続いていく。ここで語っているのは、粗略な政治や経済の空間ではないことをあらかじめことわっておく。そのうえで、この共同の空間はそこで生活を営むものの心構えによって広くもなり、狭くもなる。家族を身近な共同生活の営みとしてあげたが、たとえば、まちはこうした住処、人間さまさまのたたずまいの集まりである。まちは重複するがこうした家並みのたたずまいの集まりから始まる。

しかし、共同の生活をいとなむためには、ちょうど人が直立姿勢でしばらく沈黙のままたちどまるという「たたずまい」本来の姿勢が要求されるように思われる。現実には、人は共生の場を張り合いの関わりにし、そばにいる人をかえりみないで膨張しそのそばの人の犠牲において居場所をとりあげてしまう。ここに獣のならいである縄張り争いができてしまう。ここでは、単なる生存競争

のために、一方が他方の犠牲において力まかせにして、その場を生きづらいものにしてしまうのである。ボルノウはこれを簡潔つぎのように述べている。「あるものが場所をとれば、他のものは退かなければならない、追い払われたくないものは、追い払うよりしかたがない、そこでは争いが支配し、力だけが勝利をうる」<sup>8)</sup>。周知のとおり、複数の「民族」や「集団」という名の信じ込みが共生の場を険悪な闘争の場にしてしまう。ボルノウはピンスヴァンガーを引用して次のように言い当てている。愛と権力は相互に排斥する。おたがいに愛し合う私たちのわかちがたい空間を無限に認めあうことが必要なのであると。そして、愛あるものの目には測り知れない深みと広がり創出されると。愛するものはむつまじくともに生き、おたがいの人生を豊かにしあうと<sup>9)</sup>。絶対的な愛に真摯に向き合うとき、愛のために地上の特別な場所を創造するという自由な決心が本来の家族、そして、魂のふるさとの基礎を次第に生じさせることができる。この場合、人は安心して信頼する気持ちにさせられ、どこでもわが家にいるようになくつろぎを感じ、なにものにもとらわれはしない。おたがいが慮って分をわきまえた理性的な共同の努力が実を結ぶとき、ほんものの暖かみのある魂のふるさとが新しい生活の場となってたちあらわれる。愛を知る人は、有頂天になって、逆説的であるが、地理学の知的な範囲を遠く超越して、足が地につかず、まわりのひとからたえずほほえみをうける。しかし、もう一方のものもこれを理解しようとする。おたがいの思いやりと少しの気遣いによってほんもののふるさと、やすらぎの場がこのときに創出される<sup>10)</sup>。いわゆる、ふるさとへの帰郷とは場所愛(topophilia)のことである。それは、いきいきとした、ある場と人々の愛情あふれたつながりのことである。この帰郷は具体的に生きられる生活のなかからパーソナルに創出される<sup>11)</sup>。自我の象徴でもあるわが家を超越して、信頼のうちによりおおきな共同の家に身をゆだねて

いくことができる。モモは、超然として沈黙のうちに天空が奏でる荘嚴な音楽に聴き入ることができただけでなく、敵対しあう双方の話にひたすら耳を傾け、共生の場をつくりだす稀有な小さな少女であった。

#### 4. 様々な倒錯の危険性

ここでは、すでに述べた真の愛ある共生の空間創出から大きく逸脱したものを、三つとりあげたい。権力と闘争の空間のことである。はじめに、戦争遂行国家（war-making state）、次に劇場国家、最後に王権神話という作り話である。

最初に戦争遂行国家という倒錯について説明したい。これは、「戦争」または「外敵」という目的で、ありとあらゆる資源を総動員して、国家という人工的な装置をつくりあげるといふ現象のことである。逆も真なりである。国家が支配基盤を固めるために、暴力装置である軍隊をつくりあげる。この倒錯の詳細については、避けたい。チャールズ・テイラー、ブルース・ポーター、ナイジェル・ハリスらの著作の語るところを聴き入れば、国家というものと戦争というものが密接につながっていることがわかる。戦争というものがいかにひとりひとりのかけがいのない人間の尊厳をないがしろにして、人工的なものである国家というものに隷属させてきたかを端的に指摘している<sup>12)</sup>。その倒錯を人間の歩んできた現実の歴史として率直に認めなければならない。しかし、これは無償の愛をまえにしたおたがいのふるさとへの帰郷に対する明らかなまやかしであることがわかる。否、背反である。わたしは、力による空間支配の人間の過ちをこれらの作品から学んだ。

つぎに劇場国家という欺瞞である。権力を持つものが国家という偶像崇拜の偽りをおおい隠すためにその支配の荘嚴さを仰々しく感傷的な礼拝などの儀礼自体を手段として演出してみせることによって人々をひれふれさせる状態のことである。中味のない力の誇示をみせかけの祭祀性によって

人々の心理をあやつり、統合させるという狡猾な演技である。このとき、獣は「聖なるものの皮」をかぶってやってくるが、それは、いずれその虚構を露呈せざるをえなくなる<sup>13)</sup>。

また、このことに付随して、近代になってからの肥大化した帝国は軍事と地理学、地図作製、さらにもっともらしい「学問」の衣をきて地理学協会なるものを世界の各帝国の事例である程度、共通のこととして、植民地化と「文明化」のために利用してきたことも事実である。その証拠に帝国地理学協会なるものが軍人の参加なしには成り立たなかったことが示している<sup>14)</sup>。

最後にすでに上で話をしたことと関係づけられるものである。王権神話という古からの偽りである。王家や王国の起源を神々の王の主権が太古に一連の闘争の過程をへてかたちづくられたかのような物言いのことである。ロムルスとレムスを主人公とするローマの建国伝説や日本の天孫降臨神話、古代エジプトのファラオ、ギリシャの都市の守護神伝説、中国の「天子」としての皇帝崇拜と人心掌握の凶悪な偽りのことである。

#### むすびにかえて

地理学について拙い理解のひとつの試みをここまでおこなってきた。重要な問いかけは、超越した無償の絶対愛をまえにして、謙虚にやすらぎのある共生の場をいかにひとりひとりが身近な日常生活の中で、おたがいにもうひとりのひとと創造していくかというすこしの勇気と自由な意志による決心が重要なのではないかということである。「共同体」ということばを安易に使ってはいけない。最も凶悪で虚偽なるものは、すでにのべた「聖なる衣をまとった獣」である。複雑な議論は、いっさいやめにして、モモのように超然としてみあげて夜の星空が奏でる天空の沈黙の音楽に聴き入り、地においてはひとりひとりのはなしに耳をひたすらかたむけることが地理学者の物言いをすてさせて、やすらぎと居心地のよい場をおのずから創出

させるのではなかろうか。たとえ、それがむずかしいようにみえても。

## 注

- 1) バスカル (前田陽一、由木康訳)、『パンセ』、中公文庫、東京、1973年、301頁。
- 2) エドワード・レルフ (高野岳彦、阿部隆、石山美也子訳)、『場所の現象学』、ちくま学芸文庫、東京、1999年、294頁。
- 3) オットー・フリードリッヒ・ボルノウ (大塚恵一、池川健司、中村浩平訳)、『人間と空間』、せりか書房、東京、1978年、155頁。
- 4) 栗原成郎、『ロシア異界幻想』、岩波新書、東京、2002年、34～37頁。
- 5) ガストン・バシュラール (岩村行雄訳)、『空間の詩学』、ちくま学芸文庫、東京、2002年、104～106頁。
- 6) 前掲書、ボルノウ、136～137頁。
- 7) ミヒャエル・エンデ (大島かおり訳)、『モモ』、岩波書店、東京、1976年、11～30頁。
- 8) 前掲、ボルノウ、242頁。
- 9) 前掲、ボルノウ、243～244頁。
- 10) 前掲、ボルノウ、249頁。
- 11) Yi-Fu Tuan, *Topophilia*, Columbia University Press, New York, 1974, pp. 1-12.
- 12) See Charles Tilly, *Coercion, Capital, and European States, AD990-1992*, Blackwell, Oxford, 1990; Bruce D. Porter, *War and the Rise of the State – The Military Foundations of Modern Politics*, the Free Press, New York, 1994; Nigel Harris, *The Return of Cosmopolitan Capital – Globalization, the State & War*, London, 2003.
- 13) See Richard S. Wortman, *Scenarios of Power*, Princeton University Press, 2006, Princeton.
- 14) See Robin A. Butlin, *Geographies of Empire*, Cambridge University Press, Cambridge, 2009, Chapter 6 ; ブライアン・グレアム、キャサリン・ナッシュ (米家泰作ほか訳)、『モダニテイの歴史地理』上巻、古今書院、東京、第四章および第五章 参照のこと。

(いじま・やすお 聖学院大学政治経済学部政治経済学科教授)